修理前

修理後

入賞作品

兄とウエストポーチ

或る日、一人暮らしの兄から電話があった。「ウエストポーチのベルトがはずれて使えなくなった」と。年老いた兄は杖をつくので、このウエストポーチは病院の受診やリハビリ等外出の折にはなくてはならないものだ。しかし外側の皮には傷、内側もポロポロはげて色も褪せ、すっかり古びた様子だ。買い替えを奨めたが、修理してくれと言う。

１５年以上前、兄はちょっとした隙に肩かけカバンを盗まれてしまった。もちろん、引き出したばかりの生活費等もろもろ返ってこなかった。その出来事がきっかけで、私はこのウエストポーチをプレゼントした。お出かけの時は腰にぴったりはめて、安心、安全だった。

幸い修理店の存在を知り、丈夫に綺麗にしていただいた。

早速持って行くと、兄はホッとした嬉しそうな顔を見せた。長い間使い続けていくうちに愛着も湧き、壊れるとガッカリしてしまう。兄はこのウエストポーチがお気に入りで本当に大切にしていたんだと感じ、簡単に買い替えを奨めた私は反省しきりだった。

大分県　大宅妙恵子さん

（修理店）有限会社　いなづま

入賞作品

靴との遭遇　～私とブーツの軌跡～

私がこのブーツと出会ってもう１０年になります。このブーツを履く度に必ず革用クリームを付けて磨き上げ、とても大切にしてきました。しかし最近、ブーツの劣化が目立つようになり、新しくブーツを購入するか迷ったのですが、このブーツを手放すことが出来ないと思い、クリーニングに出すことを決意しました。

私はバイクが趣味で、幼い頃から憧れだったバイクを社会人になり購入しました。ようやく手にしたバイクが似合う男になりたいと思い、初めて購入した高価な靴がこのブーツでした。当時の私にとってはとても高額でしたが、一目惚れをし、これ以上のブーツはこの先、見つかる気がしなかったので購入を決意しました。とびきりイイ靴を履けば、とびきりイイ場所へ靴が連れて行ってくれると聞いたことがあり、このブーツをとても大切にしました。このブーツを履いて、バイクに乗ることは私にとって、ステータスそのものでした。

今回この大切なブーツをクリーニングに出し、新品とは違う味わい深い仕上がりを見て、今までの思い出とブーツのキズがとても懐かしく感じました。寂しい気持ちと、キレイになり嬉しい気持ちと複雑ですが、生まれ変わったこのブーツと共に、また新しい思い出とキズを増やしながら大切に履いていきたいと思います。

大分県　北迫孝章さん
（修理店）有限会社　いなづま

入賞作品

時を重ねた美しい物

明治生まれだった祖母の和箪笥は、主人が生まれる前から居間に置き、毎日使う衣類や生活道具を入れ、時間を重ねていました。十七年前、住まいを変えてからは、役目を終えたように祖母の部屋で時々出し入れするだけとなっていました。そんな箪笥を改めて見ると、外れた背板や取っ手、また家族で繕った手直しの跡。修理が出来たらと思っていた頃、「木工房ひのかわ」さんの家具の再生を知りました。具体的なイメージを伝え、あとは全てお任せしました。数ヶ月後、職人さんの丁寧な手仕事により再生されたサイドボードとチェストは、再び居間に置きました。

その日以来、嫁いだ頃の四世代で暮らした暖かい空気が流れているのを感じます。

永年使って出来た傷や繕いの跡は、全て生活を支えてきた証。物は十分足りている現代、これからは、時を重ねてきた物の意やそれらを大切にした先人の思いを知り、物に向き合う。そんな時代に来ていると思います。それらが職人さんの手を通し出来た時、きっと心が満たされると今回の件で思いました。

熊本県　清田裕美子さん
（修理店）有限会社　木工房ひのかわ

入賞作品

一生ものとして買ったなら

ネットや家具屋を探し歩いて、やっと見つけたお気に入りのビンテージ椅子。主人共々、愛着は相当なもので、大切に扱っていましたが、突然にそれは起きました。

「椅子が傾いているよね？」と主人から言われて見てみると、確かに傾き、グラついていました。そこからが大変でした。買ったところでは修理が出来ない。家具店でも相当な金額を提示されて・・・。「一生もの」として大切にすると決めて買ったのにと意気消沈。

そんな時、遊びに来た友人から紹介してもらったリペアの専門店で悩みは解決しました。どのような補修をするのか、費用はどのくらいかかるのか、しっかり打合せも出来ました。補修に出して二週間、何処を修理したか出来るだけ分からないように綺麗に直って帰ってきました。その時に感じた、「大切な家族が病気の治療を終えて帰ってきたような」不思議な感覚・・・。

大切にすると決めた時、家具もちゃんと面倒を看なくてはいけないという思いを感じた時から少しずつですが、ものを大切にする気持ちに変化が出てきました。お気に入りの椅子はいつもの場所で何も言いませんが、とても良い勉強をさせてもらいました。

福岡県　重松佐和子さん

（修理店）有限会社　エコアクリエイト

入賞作品

コーヒーサイフォンとコーヒーミル

我が家では、昭和五十年頃からコーヒー豆をミルで挽き、サイフォンで淹れたおいしいコーヒーをいただいています。

サイフォンコーヒー全盛の時代、私は結婚をし、なけなしの給料をはたいてガラス製のコーヒーサイフォン一式とコーヒーミル一台を買い揃えました。「長く使えるいいものを」という友人のアドバイスで、ビギナーには分不相応な高いものを購入しました。

以来四十年近く、引越やマイホーム建設、増改築と何度か生活の場が変わりましたが、その間サイフォンとミルは常に私と共にありました。四十年の間に、サイフォンのフロート部分はひび割れ、ミルの側面は傷み、いろいろな部分が破損しましたが、自分で修理をしながら使い続けています。先日も、息子たちや孫たちをはじめ、たくさんの友人知人が我が家のサイフォンコーヒーを楽しんでくれました。

時代は既にインスタントからラテコーヒーへ移行していますが、我が家ではこれまでと変わらずに、思い出のいっぱい詰まったサイフォンとミルに感謝の気持ちを抱きながら、大切に大事に長く使い続けたいと願っています。

宮崎県　鈴木莞爾さん

入賞作品

蘇えったタンス

娘が、新築の家で、二十年前に亡くなった母のタンスを、大好きだったおばあちゃんの形見として使いたいと言いました。でも、生前母が、戦時中に買った物なので、あまり物が良くないと言っていたし、随分黒ずんでいたので（二十年もほったらかしで）どうかなと思っていました。

ところが、偶然立ち寄った県伝統工芸館で桐タンス展があっていて、「タンスの再生ができます」というパンフレットが目に止まりました。これも御縁だと思って注文しました。半年後に、待ちに待ったタンスが娘の家に届きました。見るとまったく新品に生まれ変わっていて、木の香りと共に、母の姿が蘇えってきました。

本当に嬉しくて、職人さんの心のこもった仕事に感謝で一杯でした。着物好きだった母の着物や帯、そして健康にいいと言われたので、孫の服も入れました。

七十年以上たったタンスが、これからまた長く使い続けられたら、母もタンスも喜んでくれることでしょう。

熊本県　濱邊待子さん
（修理店）桐里工房

before

after

入賞作品

レトロな薬品庫は保健室にお似合い

創立百二十六年を迎える本校の保健室に、昭和感漂う木製の薬品庫があります。その薬品庫は、昨年夏に復活しました。

きっかけは、養護教諭からの相談でした。「傷だらけでガラスもきたないし、鍵も壊れていて安全に保管できない。買い換えるには高額だし、木製のこの薬品庫も捨てがたいんですよ。」と。相談を受けた事務担当は、「教頭先生に頼んだら直してくれるかも。」と私の元へやってきました。

その棚を見て私は、このまま捨てられてしまうのはとても偲びがたく思えました。そこで、扉や引き出しを一度外し、表面を研磨・塗装、ガラスは磨き、使わなくなった印鑑ケースの鍵に合わせ鍵穴を加工、鍵もかかるようになりました。リメイクされた薬品庫を見て、養護教諭は「私が個人的にほしいくらいです。」と喜んでくれました。

今では、薬品庫として立派に機能するだけでなく、レトロ感いっぱいの雰囲気は、あたたかくやさしい保健室を演出してくれています。

熊本県　古家慎也さん

入賞作品

８０年前の桐タンスをよみがえる思い出のタンス

私が中学３年に進級した昭和３２年、近くの役場から出火して５軒ほど焼けるという大火がありました。タンスを家の近くの田んぼまで運んでいた時、タンスの開き戸の部分やその他引出しの金具やタンスも全体的に傷んでしまいました。父親が残してくれたタンスをそのまま使用しておりましたが丁度６年前頃に福岡で九州家具展示会があり、家具業者に相談をもちかけたところ、大川の桐里工房さんから綺麗に８０年前のタンスに蘇らせる事が出来ますとの話を拝聴し女房とも相談し、リフォームして戴くことに決め、対馬から船便にて発送致しました。丁度私も自宅を増改築する事にしました。私たちも大川の工場に出向きタンスの出来栄えを見て綺麗に完成している事に感動致しました。自宅の増改築も終わり、リフォームしたタンスを運んで来て戴き床の間がある和室の畳の間に据え付けて戴きました。このタンスは公共放送のテレビで２回放映されたとの事です。８０年前の名品の桐タンスが蘇り、我が家の誇りであります。これからは親から子に、孫にと大事に引き継いで行きたいと思います。

長崎県　増田廣喜さん
（修理店）桐里工房

入賞作品

大きな古時計

昭和３年セイコウ社製の秒針までついた１メートル位の時計で、お酒で「首位」を取った記念に頂いたものです。今まで動かず、お座敷に掛けてありました。私は「せっかくだから、人が通る土間で見てもらおう」と主人に相談して移動させました。

ある時、伊東時計店の奥さまが家に来られました。「立派ね」私は、「もう動かないので土間に飾っています」と答えました。

「これ、動くようになるよ。修理しない？」

私は、半信半疑で修理に出しました。一か月経ちました。

「できました」と電話があり時計が戻ってきました。さあ、ネジをかけました。「チクタク」と動くではありませんか。私は、亡くなったおじいちゃんが時計と共に戻ってきて、「私達を見守っている」そんな気がしてなりません。

「あきらめていたのが、修理によって命を吹き込んでもらった」私の楽しみは、一週間に１回時計のネジまきし命を吹き込むことです。本当に修理でこんなに幸せを感じることはありがたいことです。そして、子供達に、物の大切さを教えていく切っ掛けになりました。

伊東時計店の皆様ありがとうございました。

佐賀県　矢野美代子さん

（修理店）有限会社　伊東時計店

入賞作品

受け継いだ魂と受け継ぐ魂

今日もグランドに大きな声が響く。このグローブは、代々先輩からファーストを任される者が受け継いできたものだ。破れては修理し、汚れたらしっかりと手入れをして大事に、大切に使ってきた。試合中、このグローブをはめていると先輩達から「頑張れ」と、声をかけられている気がする。

もうすぐ、僕も中学生としての野球生活が終わってしまう。そしたらまた次の学年に引き継がれていくだろう。

鹿児島県　鹿児島市立鴨池中学校三年　山下響暉さん

入賞作品

捨てればごみ

昨年８月、テレビ番組の「まちの修理屋さん」特集でバッグの修理店「手づくりバッグのにしき家」が紹介されているのを見て、捨てるにしのびず、押入れに放置していたバッグを思い出した。それは、知人が趣味でつくった一枚皮のバッグ。色あせ、周囲のかがり縫いはところどころ擦り切れ、取っ手はよれて、全体は波打っている。しかし、長年仕事で重宝した愛着のあるバッグ。

機会を得て、にしき家を訪ねた。差し出すのもためらわれるようなバッグだが、お店の方は快く引き受けてくださった。

できあがったバッグは、見違えるようになっていた。さすが熟練の腕という驚きと喜び。裏布と内ポケットがつき、かがり縫い、取っ手、口が補強されている。全体の配色もすばらしい。「ごみが物に変身」。

どれだけの手間がかかったでしょうか。使う人の立場にたった、職人の熱い技、心意気、愛情、すべてに感謝したい。

「ごみにするか、生かすか」は個人の判断。

「もったいない」を形にする「まちの修理屋さん」の利用を促進し、みんなでものを大事にしたい。

宮崎県　湯浅満千子さん

（修理店）手づくりバッグのにしき家